

で抱き方を伝えたり、実際に抱っこさせたりしてかかわった。

サークル内の人数が減り雰囲気が落ち着くと、3・4人で頭をつき合わせ、「これ食べさせて」「口のどこ持っていったら食べるで」「あれ？なんで食べへんの？」とハイを囲んでこども同士で話し合っている。

#### エピソード 16 自分で抱ける喜び

2009/06

うまく抱っこできるようになったケントにハイも安心して抱かれている。他のこどもが抱くとハイが動き、驚いて手を離してしまうが、ケントが抱くととてもおとなしくひっついていて、ケントにとっても自慢。毎朝、ケント「出していい？」と尋ねてはサークルまで連れて出す。こどもたちから「ケンちゃんに(サークルまで)連れて行ってもらおう」と頼まれるとケント「いいよ、こうしてお尻持ったらいいねん」と得意に伝える。



(2) 親ウサギの死

#### エピソード 17 クロとお別れ

2009/06/11

5歳児が引き継いでくれていたクロが病気で亡くなった。ハイの母親である。クロとお別れがしたいこどもを連れて5歳児の保育室へ行く。泣いた顔で沈んでいる保育者の姿を見たり、きれいな花を摘んでクロの周りに飾ったり、触って「冷たい」と感じたり、私の後ろからじっとクロを見つめていたり、いつもと違う雰囲気を感しながら「死んじゃったん?」「なんで?」「目開いてるし生きてるんちゃう?」「耳 青いなあ」など思ったことを言葉にしている。そのこどもの言葉を聴きつつ私も『本当にきれいな顔

してるし、息を吹き返すんじゃないか?』という思いと『いや、残念やけどそんなことはない』という思いが交錯して悲しくて悲しくて仕方がなかった。

#### エピソード 18 僕がお兄ちゃんに

2009/09/09

教育実習生にリョウヘイ・ケインがハイのことを伝えている。リョウヘイ「ひとりぼっちやし寂しいねん」ケイン「女の子やから寂しいねん」実習生「友だちになってあげたら?」リョウヘイ「友だちいーひんし寂しいのと違う 家族がいいひんし寂しいねん、僕がハイちゃんのお兄ちゃんになってあげる」。友だちではなく家族をなくして寂しいと実習生に伝えるこどもは、親ウサギの死に出会ったことやこれまで一緒に過ごしてきたからこそハイの気持ちに寄り添う言葉で表現するのであろう。その話を実習生から聞いて私たちは、感無量だった。

(3) 小鳥当番が始まるともにかかわり始める

#### エピソード 19 ハイの餌の調達

2009/09

2学期に入りこどもの自立と共に新しく小鳥当番を始めることにする。当番のこどもたちが小鳥の野菜を家庭から持ちより世話をしていくが、野菜が多すぎて困った時は「ハイちゃんにあげたらいい!」との声上がる。最初の内は小鳥の残った分をハイにくれていたが、ハイが目に見えてよく食べるのが嬉しかったり、可愛いと感じていたり、わざわざハイの分を残してから小鳥にやったり、お母さんにハイの分も別に持たせてもらったりしていった。今までは花梨グループが世話したりかかわったりすることが多かったが、小鳥当番をきっかけに他のグループや関心の薄かったこどもたちもハイに親しみをもつようになった。

エピソード 20 呼びかける 2009/11 下旬

園庭がイチョウの葉で一面黄色に染まっている。そこへハイも出てきては走りまわったりイチョウの葉を食べたりしている。自分たちは食べないものだったので「ハイちゃん！あかん！あかん！」と止めるこどももいるがハイはお構いなしで食べ続けている。その食べっぷりのよさを見ながら、私「おいしいのかなあ？」とつぶやく。こども「好きなん？」私「よう食べてるねえ」と様子を見守る。

(4) こどもと同じように

エピソード 21 正月を迎えるために 2009/12/09

餅つきの日、こどもは各自持ち帰る鏡餅を作る。私「ハイちゃんもいい年が迎えられるように…」と小さな鏡餅を作りつつ「あら、三方作るの忘れてたね」と気付くと、ヨシノ・ユララ・リョウヘイがかまぼこ板にマジックで絵を描いて作ってくれる。お懐紙を敷き鏡餅をのせると、ハルカが園庭から赤くなる前のオレンジ色のナンテンを見つけてきてその上にのせた。リョウヘイ「ハイちゃん、できたよ〜！」とみんなでケージの上（自分たちの鏡餅はロッカーの上に置いていたからだろうか？）に置きに行く。が、グラグラして落ちそうなので、保育室の棚に飾る。ハイができないところは自分たちがカバーしてやりながらも、自分の鏡餅ができた嬉しさを共に味わいたいという思いが、ハイも自分たちの仲間だと感じているようで嬉しかった。

エピソード 22 お誕生日おめでとう 2010/02/15

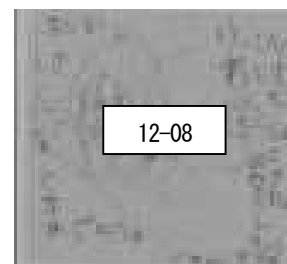
登園時シールを貼りながら、日曜日がハイの2歳の誕生日で私の家でキャベツ・キュウリ・ニンジンのケーキを作ってお祝いした話や2

年生になったミュからのお祝いの手紙・チョコちゃんからの手紙（母親の代筆）とプレゼントのニンジンのお話をすると、いろいろなプレゼントを作り始める。こどもたちの気持ちがそわそわ、わくわくしているので、主役のハイを保育室の中にケージごと連れてきて、その横の壁面に届いた手紙を貼っておく。ユイノ「ケーキつくる紙ほしい」アズサ「私もほしい」サトミ「これ作ったしパーティに飾って」サクラ「みんな！ここに（壁面にナイロン袋をつり下げて）プレゼント入れてな！」キノン「これ（ここに入れて、とかいた紙）、サクラちゃんの横につけて」マサキ「これ（紙のスイカ）はケーキの横に置いて」とそれぞれが誕生日を祝う気持ちでパーティの準備が始まった。白い段ボールを土台にして作ったケーキには本当に食べられるように、とレモンバームの葉がセロテープで留めて飾られている。そこにろうそくを立てていくハヤト。同じくレモンバームを水に浮かしたハーブティも添えられている。

グループのみんなが集って牛乳を飲む時に誕生パーティをする。「お誕生日おめでとう！かんぱ〜い！」とハイを囲んで飲み始める。ハイのケーキとハーブティもケージに入れてやる。「食べへんやろ〜」とみんなで見守る中、レモンバームの葉をかじるハイに「食べた〜！！」とびっくり、思わず「おめでとう！」の声がこどもから挙がる。みんなの思いがハイに届いたと感じとれる驚きと喜びの瞬間だった。翌日リョウヘイからカードが届いた。

エピソード 23 感謝の表現 2010/02/16

お祝いをもたらしたチョコちゃんに“ありがとう”の返事を描く。自分たち



のハイちゃんをお祝いしてくれて嬉しい気持ちを絵にして贈ることにする。また、2年生のミユの手紙に刺激を受けたリョウヘイは、家に帰って「おめでとうの手紙」を書いてくる。

#### (5) 一緒にいる・仲間のハイ

### エピソード 24 一緒に部屋で

2010/02

誕生パーティの日からテラスは寒いからと、保育室の中にケージを置いていた。距離的により身近になったので登園後、興味をもって見るこどもたちの顔ぶれも変わり、今まで世話をしていなかったカズキ「ご飯ないで」と気にしたり、ユウスケ「見て、こんなんしてる」と顔真似をしては笑ったり、ヨシノ「やとくで」と一人でトイレを換えたりと、みんなが気にして様子をみたり世話をしようとしたりする。絵本を読んでいるとふとハイの方を振り向き、やんちゃんダイチも「一緒に聞いているなあ」とひそひそ声で嬉しそうにするなど、生活の場を共にすることで自分たちの仲間だと思って接している機会が増えた。

### エピソード 25 ハイも一緒に進級

2010/03/18

1年間生活してきた保育室やおもちゃの大掃除や片付けをしているときに、私「ハイちゃんどうしようね？」と話していると、「ハイちゃんは抱っこする（抱っこして2階へ行く）やろ？ほんで、これ（ケージ）は3人でよいしょ、よいしょって運んだらいいやん」と、共に一緒に大きい組になることを楽しみにしているこどもたち。

### 3 私と共に留まるハイと進級した5歳児

こどもたちは5歳児クラスに進級となり、1・2年間を共に過ごしてきたハイと私は4歳児クラスに残ることになった。5歳児が2階の

保育室へ向かう時にハイと出会えるように、階段の下にケージを置いた。するとやはり、登園時や私の顔を見に来た時にハイに話しかけたり、世話を気にしてくれたりする姿が多く見られた。

#### (1) 思いを寄せる

### エピソード 26 覚えてるか？

2010/04

登園後、私の顔をのぞいて「おはよう！」と声をかけてから遊びにでかけていたハルカ・ミウ・コウキらは、遊びに出かける前に、ハルカ「お〜いハイちゃん、久しぶり。ハルちゃんやで〜、覚えてるか？ちっちゃいとき一緒に遊んだやろ？」とハイに声をかけている。私「覚えてるよねえ、ハルちゃんのおうちの台所でごろーんってなってたんだよねえ。ハルちゃん、おっきい組になったんだって」とハイに話しかけながら応える。

### エピソード 27 ウンコいっぱいやん

2010/04

毎日ハイの様子を見にくるヨシノ。「まだウンコいっぱいやん！ヨシノちゃん、お世話したげよか？」私「ありがとう！助かるわ〜」と任せる。4歳児が様子を見ている中、ヨシノが世話を始める。また、私と一緒に4歳児がエサや葉っぱをやっている時には、4歳児に水の替え方を教えてくれたり、まだ怖くて抱けないこどもの代わりに園庭のサークルにハイを抱っこして連れて行ってくれたり、と困っていることに気付いて力を貸してくれ、自然な異年齢のかわりが見られる。

### 4 ホームステイをとおして

#### (1) 初めてのホームステイ3歳児の家庭へ

3歳児1学期末の懇談会で、夏休みの間も自分たちでハイの命を繋いでいきたいことを伝

え、保護者にホームステイ先募集の声をかけた。保護者の協力を得て、間をあけることなく預かってもらうことになった。保護者にとっても初体験なので、世話の仕方を詳しく書いたメモを付けた。

#### エピソード 28 心配しつつ送り出す 2008/07~08

ホームステイに出す前に「シートが〇枚で、タオルでしょう？おしっこちゃんとできるかなあ？迷惑かけへんかなあ？」と独り言を言いながら準備をしていると、保護者「わが子をお泊りに出すみたいですね」と笑われる。

#### エピソード 29 お帰りなさい 2008/09/01

2 学期始業式の日、ハイがキャリーバッグに入って登園してくると、ハルカ・ミウ・リコ・アズさは興味津津で覗きにいく。夏休み、ホームステイで預かったこどもたちはより親しみをもって、ハルカ「ハイちゃん、うちで、きれい好きやったで」とその様子も教えてくれる。

(2) 二度目のホームステイ 4 歳児の家庭へ

#### エピソード 30 ハイの夏休み 2009/07/16

夏休みに入る前に、こどもたちにハイの夏休みについてどうするのか投げかけてみた。夏休みの間もハイへの思いがつながるように、とこどもが幼稚園に来ない間、ご飯がなくてお腹が減ったり、掃除してもらえなくていやだと思ったり、一人で寂しかったりすることをこどもたちの感情と重ねながら伝えていった。それと共に、一緒に家に連れて帰って世話したり遊んだりする方法があることも伝え、やってみたいこどもに家の人と相談してもらった。

#### エピソード 31 ハイの冬休み 2009/12~2010/01

マサキの母が「下の子が大きくなったからもう大丈夫です！」とホームステイに協力してもらえる。そして、預かる次の方も心配だろうから、と自らノートに世話の仕方をまとめて書いてこられた。そのノートは写真付きの日記になっており、マサキ・イズミ・ハイ 3 兄弟の育児日記のようだった。親子でハイとの生活を楽しんでられる姿が浮かび、いい時間を過ごされたことを嬉しく思った。

#### エピソード 31 念願のホームステイ 2010/01/25

3 歳児の頃から世話をつづけてきたヨシノだが、双子の弟妹がまだ小さく、連れて帰る手段もなかったため、なかなかホームステイができなかった。が、日曜参観で父親と 2 人の登降園の日、代休の 1 日だけだったが連れて帰ることができた。日曜参観のアンケートには父親から『ハイちゃんと楽しく過ごせました。ありがとうございます』との言葉が添えられていた。

#### エピソード 32 楽しさの連鎖 2010/02/

保育参観日の朝にホームステイ先のマサキ家から帰ってきたハイ。私「おかえり！楽しかった？」とハイに話しかけながら迎え、再会を喜んだり、マサキに家での話や心配事を聞いたり、元気に帰ってきてくれたことをマサキの家族に感謝したり、と周りのこどもたちやおとなにもホームステイの楽しさや大切さが伝わるように…と願った。

## IV 考察

本稿では、ウサギの飼育を通してこども、保育者、保護者がともに生活を営んできたなかでの体験を、エピソードを通して「ウサギ物語」として語ってみた。

まず、そのなかでそれぞれのこどもにとって

「ウサギ物語」から見えてきたものをいくつかの観点から述べてみたい。

### 1 ウサギとの生活のなかで

・入園や進級に伴う環境の変化の中で不安定な時期にある子どもにとっては、世話をする保育者の介助のもとで、ウサギのからだの温もりや柔らかさに触れることやしぐさを見つめることが、心を開放し安心感を得ていく経験になった。

・「ケンちゃんに（サークルまで）連れて行ってもらおう」と頼まれるとケント「いいよ、こうしてお尻持ったらいいねん」と得意に伝える。入園当初は不安定で保育者のそばにいてハイの世話をずっと見ていたケンが、ハイを抱くことができることで、みんなから頼まれ自信を得ていくことが分かる。そのケントの姿を身近に、自分もしてみようと挑戦する心が子どもから子どもへと広がる様子も分かる。

・「友だちがいなくて寂しそうね」と、おとなから問われて「違う 家族がいなくて寂しいねん 僕お兄ちゃんになったげる」と、応えるまでにハイを巡って日々起こっている出来事を、自分の身に置き換えて語れるまでに心情的な感覚を身につけている。

### 2 遊びにおける二重性のなかで

・ウサギの世話をしているときには、ウサギは子どもにとって客体であるが、自分がウサギになって遊んでいるときは主体であり、そこに、あたか

もウサギの身になる感覚を体験する。そのことは、他者に対する心の理解にも繋がっていく経験になると考える。

・2009年度研究での5歳児になると「ウサギになったときの自分は、いたずらや甘えと自由に感情を表出」しており「自分に戻ると、その感情は抑制され5歳児としての振る舞い方を

する。その二重性を行き来することが逆に、うまく自己を振り返りコントロールする力身につけるように思う」が、3歳児においては、ウサギになって遊ぶことを楽しんでおりウサギと自分とを一体化させている。4歳児になると、少しウサギを対象化してみるようにもなり、微細な感情発達と共に5歳児の様相に近づく兆しが見てとれる。

### 3 共にいる保育者の語り

・ウサギに心があるように保育者が『おいしいねって』『お顔かいかいって』と話しかけている。保育者は言葉を話さないウサギの思いを代弁するような関わりをすることが多くみられる。それは、人もウサギも同じ動物であり生きていることを伝え、教育要領に掲げている「…親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探求心などが養われるように」との願いがあるからである。その語りが子どものウサギへの関わりに影響を与えていく。

そのことは、3年生になったマナやミュウの『まいにちあえないけれど クロとハイのかおはわすれられない』との手紙や、『ハイや〜かわいい』と呼びかける姿や小学生の手紙に刺激を受けて4歳児のリョウヘイが、ハイが誕生日を迎えたことと自分の年を重ねて、誕生日の喜びを手紙に綴るなどの表現を生んでいる。それは、子どもの心情的な感性の育ちと見ることができる。

・保育者が育て親として『いっぱい走って遊べますように ハイ』と七夕飾りに書いたり、ホームステイに出す前に「シートが〇枚で、タオルでしょう？おしっこちゃんとできるかなあ？迷惑かけへんかなあ？」と言いながら準備をしている姿を通して、保護者から「わが子をお泊りに出すみたいですね」と笑われるまでに「育てる営み」の共感を保護者とも育んでいるといえる。

ところで、ウサギの飼育をめぐる物語は、『1. ハイとの出会い 2. かかわりはじめる 3. “こどもと同じように 4. 一緒にいる・仲間のハイ』といった展開をもつ。このストーリーのなかに生きることは、こどもの育ちに重要な意味があると考えられる。ハイとの出会い、自分たちと一緒に育つハイ、ハイをめぐるいろいろな人の関わりを見聞きすること、親ウサギの死を垣間見るといった、命のつながりをめぐる出来事（ストーリー）のなかで、こどもは、親しみ、愛着、驚き、慈しみ、喜び、心配、不安、悲しみといった様々な感情のうねりや情緒的な体験を豊かにしている様子が、エピソードからもうかがい知ることができる。そのような情緒的な体験は、「心情・意欲・態度」を育む幼児教育にとって大切になることはいまでもない。それだけではない。この「ウサギ物語」のなかで、どんな食べ物を食べるか、どんなウンチをするか、跳ぶ力、走る速さ、どんなところに隠れるか、そして親ウサギの死、といった一連の体験を通して、習性や生命についての認識も芽生えていく様子もうかがえる。考えてみると、そのような豊かな幼児期の情緒的な体験こそが、じつは他方で「なぜ?」「どうして?」「どのように?」「どうすれば?」といった問いや工夫を引き出す契機となってくるように思われる。まさに、それは科学する心を培い小学校教育へ接続していく基盤となるものでもあろう。

## V おわりに

継続する飼育のいのちは、人と人とのネットワークも育んでいる。2010年5月に日本獣医師会の皆さんの協力を得て新たに子ウサギの仲間を迎えた。そのニュースを知って、2008年度卒園生（現在小学3年生）が、幼稚園に訪れた

ときのエピソードを追記したい。

可愛すぎて帰れへん

2010/05/13

ノノ「ウサギ見に来た」と一人で園にやってくる。子ウサギを見るとノノ「可愛い〜」と赤ちゃんを見たときのような笑顔が出る。ノノ「抱っこしていい?」私「いいよ、まだ赤ちゃんやし座ってね」ノノ「わかった」とケージの中に恐々手を入れる。ケージの中で子ウサギが動くと、ノノも驚いて手を引っ込める。あんなにウサギと一緒に過ごしてきたノノがなかなか抱っこできないので、相手が小さすぎて躊躇しているのかと思いきや、ノノ「久しぶりやし、抱き方忘れた」とのこと、私「そうか、もうずっと抱っこしてないもんなあ、ほらほら、お腹とお腹を合わせて…」といいながら子ウサギをノノのひざに乗せる。一度抱くと思い出したようにノノ「可愛い〜」と片手で撫でながら抱っこする。ずっと抱っこしていたノノに、私「もうそろそろ帰る時間やなあ」と声をかけると、ノノ「あかん、可愛すぎて帰れへん」となかなか子ウサギから離れられない。私「また今度おいで」ノノ「いいの?」私「いいよ、」と約束をして帰る。

悲しかったから…

2010/05/24

ノノとナツミが学校の帰りにやってくる。ノノ「今どこにいるの?」と尋ねてくる。「パンタ（8ヶ月）は私の家、ハイは5歳児のマサキくんの家で、ウメとサクラ（2ヶ月）はまだ小さいから幼稚園にいるよ。マサキくんの家からは大雨やからもう一日預かってくれるって電話があってね…」ナツミ「いつも連れてくんの大変やなあ」ノノ「でもお母さんいはるしなあ」ナツミ「でも（休園で幼稚園が）1日ないし、長いこと（一緒に）いれていいなあ」とホーム

ステイの大変さと楽しさの両方を感じている。

しばらく話した後、私「じゃあね」と送った時ふいにナツミが振り返り、ナツミ「ほら、今日、私らちょっと目、赤く腫れてへん？」と言う。ノノはナツミに「そのこと言うの」と驚いたように目配せを送っている。ナツミ「あんな、今日、教育実習の先生とお別れやって、悲しくて泣いてしまっただけか。そやし気分転換にウサギ見よかな、と思って」と。言い終わるとナツミとノノ「じゃ」と手を振って帰っていく。私「またね」と見送る。

ウサギの飼育の保育を最初に経験した子どもが就学後も、ウサギのニュースを聞きつけて心配したり、期待したり、喜んだりと様々な感情のうねりと共に幼稚園にやってくる。幼児期にウサギと親密だった子どもが、世話を保育者に代わって手際良くしたり、誕生を祝いカードやプレゼントをくれたり、幼稚園の子どもに絵本を作ってくれたりする。それぞれに不安を抱えていた子どもである。その子どもたちが、ウサギと保育者との情緒的な深いつながりを今も育んでいる。

(京都教育大学附属幼稚園)

### 引用・参考文献

岩田純一(2001)「<わたし>の発達」ミネルヴァ書房

岡本夏木(2005)「幼児期」岩波新書

中川美穂子(2007)「(相手の感情と身体)を理解する脳をつくる」文部科学時報 pp.51-55

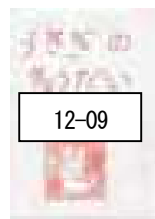
中川美穂子(2007)「小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 4:53-65

鍋島恵美・高野史朗・光村智香子(2010)「ウサギと共に暮らす日々のできごとから学ぶうさぎの飼育の保育を通して」京都教育大学環境教育研究年報第18号 pp.1-24

無籐隆(2009)「幼児教育の原則」ミネルヴァ書房

文部科学省(2008)「幼稚園教育要領」

資料



12-09

『うさぎのきょうだい』

(小学生になったマナの作品  
幼稚園時代に遊んだ魔女も登場)



12-10

・ある森にうさぎの兄、弟がいました。兄の名前は、うぎで、妹の名前は、うやでした。うぎとうやは、いつも仲良しでした。



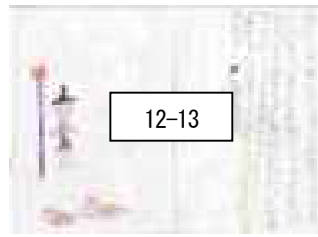
12-11

・ある日、うぎとうやは森の奥に遊びに行きました。帰りにたくさんの木に囲まれ家に帰れなくなってしまいました。



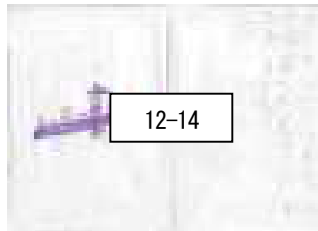
12-12

・しばらく歩くと、目の前にお菓子がいっぱいありました。飴、クッキー、キャンデー、チョコいろいろなお菓子です。うぎとうやはもりもり食べ始めました。ずっと食べていたら寝てしまいました。



12-13

・寝ている間に、魔女が来て睨んでいました。それをうぎが見つけてじっくり見ると箒が長かったため、うぎはいいこと考えて、『あの魔女は優しそうだし、なんていったら帰ってくれるだろう』(箒に乗せてもらう)



12-14

・そして、無事うぎとうやは家に帰ることができました。



12-15

・おわり  
(自由に使っていいですけど、破らないでください)